様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３１３０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2018
課題番号：２５３７００５８

研究課題名（和文）古・中期インドアーリヤ語韻律の形成と発展

研究課題名（英文）Formation and development of the Old and Middle Indo-Aryan metres

研究代表者
後藤　純子（阪本純子）（GOTO (SAKAMOTO), Junko）

宮城学院女子大学・付置研究所・研究員

研究者番号：６０２７５２３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究者が過去40年間に蓄積した、ヴェーダ、叙事詩、仏教、ジャイナ教等の文献における韻文分析を再検討し、古・中期インドアーリヤ語文献における韻律発展の歴史的展開過程を解明し原稿にまとめ上げた。インドアーリヤ語の音韻変化や朗誦環境などが韻律に及ぼした影響を考察し、音節数により規定されたヴェーダ韻律が、軽重の組み合わせによる多様なリズムを発展させ、一方ではマートラーにより規定される中期インド語韻律に、他方では全音節の数と軽重が固定された古典サンスクリット韻律に転化した具体的過程を明らかにした。さらに、これまで曖昧でしばしば誤解を招いた、音節、軽重、マートラー、休止などの韻律の基本概念を明確にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
古代インドでは、文字よりも口頭伝承がはるかに重要な役割を果たし、韻律が著しい発達を遂げた。しかし学識階級を対象とする古典サンスクリット韻律が人為的に固定され、規範として普及する一方、ヴェーダから叙事詩、仏教、ジャイナ教にいたる、幅広い社会階層における各時代の「生きた言語」の文法と韻律の実態はほとんど未解明である。近年、コンピューターによる韻律分析や統計解析が盛んであるが、伝統的古典韻律学に依拠しており、文献の実態に対応せず、誤った言語や文献解釈を招く。本研究は先入観なしに現実の文献を検討し、紀元前１２世紀頃から紀元後にいたる韻律の発展過程を解明し、信頼に値する「インド韻律概論」をまとめ上げた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this project was to compile a survey of the concrete processes of historical development of metres in Old and Middle Indo-Aryan languages. This was achieved by a thorough reexamination, from philological and linguistic viewpoints, of the mass of verses in Vedic, Epic, classical Sanskrit, Pali and Prakrit, collected and analyzed by the author over the past 40 years. This investigation elucidated in detail the way Vedic metres, based on repetition of a fixed number of syllables, brought forth rhythmical variations by combination of heavy and light syllables and how, on the one hand, these turned into the Middle Indo-Aryan metres measured by "maatraa" (temporal unit for pronunciation) and, on the other hand, into the classical Sanskrit metres in which all syllables are fixed in number and weight. This study also clarified basic, though ambiguous, concepts such as "syllable", "light", "heavy", "maatraa", "pause", etc., which were previously often misunderstood.

研究分野：インド学

キーワード：韻律学　言語学　インドアーリヤ語　ヴェーダ　叙事詩　初期仏教　初期大乗　ジャイナ教

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

1．研究開始当初の背景

古代インド文献は､その起源を紀元前１２世紀以前に持つと推測されるリグヴェーダ賛歌(韻文）に始まる。インドにおける文字の使用は紀元前３世紀のアショーカ碑文に始まるが、古い時代は主として碑文に用いられる。宗教文献においても、叙事詩・叙情詩・演劇等の文学や学問においても、口頭伝承が文字伝承よりはるかに重要な役割を果たしてきた。これらの文献の中核は韻文であり、時代と地域と社会階層に応じて、韻律が顕著な発展を遂げた。

しかしながら、学識階級を対象とする古典サンスクリット語とその韻律が人為的に固定され、規範として普及する一方で、それ以外の「生きた言語」、すなわち、ヴェーダから叙事詩、ヒンドゥー教・仏教・ジャイナ教の成立にいたる１０００～２０００年の間、幅広い社会階層で発展してきた言語の、文法と韻律の実態は十分に解明されておらず、それらの文献の正確な理解を困難にしている。

１９世紀以降、ヴェーダ、叙事詩、パーリ仏典、仏教梵語仏典、ジャイナ経典等の個別的な韻律研究が行われてきたが、それらの研究成果を活かして体系的にまとめた韻律解説書はいまだ現れず、インド学研究者の間でさえも、古典サンスクリット語韻律学の要略であるマニュアル（しばしば初心者向け文法書や辞書の付録とされる）に頼ることが多い現状である。近年、コンピューターによる韻律分析や統計解析が盛んであるが、上記のような古典韻律学の要略に依拠している場合が大部分であり、文献の実態に対応せず、誤った韻律分析に基づく不適切な語形解釈や校訂変更、思想内容の曲解を招く恐れが大きい。

２．研究の目的

韻文の口頭伝承が重要な役割を果たす古代インド文献では、韻律が顕著な発展を遂げたが、人為的に固定された古典韻律以外においては、規則も発展過程も不明な点が多く、文献の正確な理解を困難にしている。本研究者は修士論文・博士論文以来、古・中期インドアーリヤ語文献における韻律の実態を調査し、歴史的展開を解明することを研究課題としてきた。これまでに蓄積した原典の韻律分析結果の再検討に基づき、リグヴェーダから中期インド語最終段階にあるアパブランシャ語文献までの韻律を対象に、その形成・発展過程を具体的かつ体系的に著すことを本研究の目的とする。

３．研究の方法

本研究者は大学院以来４０年にわたるヴェーダ、叙事詩、仏典、ジャイナ教典の韻律分析収集から､それらの韻律の形成･発展の過程を考察し､その梗概の一部をすでに発表してきたが、本研究においては、特に以下の諸点の検討から、新たな韻律史の展望が開けつつある：

① 音節、その軽重とマートラーという概念の成立および定義の変遷；
② 休止の重要性と休止前後の音節の扱い；
③ 祭式儀礼等における韻律使用状況が韻律形態に及ぼした影響；
④ 中期インドアーリヤ語を支配する「マートラーの法則」とマートラー韻律発生との関係；
⑤ パーダ区分の変遷と言語的特性との関係；
⑥ 韻律グループ「マートラーサマカ」の展開；
⑦ ガナの起源と発展；
⑧ アパブランシャ韻律の革新性とその言語的および社会的背景。

本研究では代表者自身による韻律分析結果を再検討して主たる材料とし、他研究者による成果をも取り入れて、上記の諸点を検証し､「古･中期インドアーリヤ語韻律の形成･発展の過程」を具体的かつ体系的に叙述する｡また成果を英文および和文で出版するための原稿を準備する。

４．研究成果

上記３に示した研究の結果、「古・中期インドアーリヤ語韻律の形成・発展の過程」に関して、以下のような、重要かつ新たな発見が得られた：

（1）【音節】古インドアーリヤ語文献の韻律は、特定の音節数の規則的反復に基づく。数えることのできる韻律構成単位として､「音節」akṣara- という概念が成立し、リグヴェーダに遡る。音節の基盤は一定の持続的な発音時間を持つ母音であり、音節と母音の区分は、当初、必ずしも明確でなかった。

（2）【軽重】韻律構成単位としての音節では、母音自体の長さ、および、母音に付随する子音や休止等の条件により、「軽」laghu- と「重」guru- に二大別される。

（3）【マートラー】他方、母音の長さ（短 hrasva-・長 dīrgha-・延長 pluti-/pluta-）の計量から発して、マートラー mātrā-「発音に要する時間単位」という概念が発生し、ヴェーダ補助学である Prātiśākhya 文献では、母音のみならず、子音や鼻母音、休止等の音節構成要素のすべてに適用されるに至る。音節が母音に基づくという原則は不変であるが、音節の境界（母音に付随する子音の区分）は、韻律学、音声学、文字表記のそれぞれにおいて相違する。音声学での規定に従うと、古インドアーリヤ語では、１音節のマートラー総数が２を超えて、３～４となることが頻繁に起こる。これに対し、韻律学では､「軽」音節が１マートラー､「重」音節が２マートラーに換算される。この単純な区分法は、古インドアーリヤ語から中期インドアーリヤ語に発展する過程において中心的な役割を果たした「マートラーの法則」(３マートラー以上を有する音節の存在を許さない；長母音に複合子音が後続する場合、長母音の短母音化、複合子音の

単子音化、あるいは母音挿入による複合子音分割が起こる）に対応し、韻律と音韻変化の密接な相互影響を推測させる。

（4）【軽重の組み合わせによるリズムパターンの形成と休止】音節数により規定されるヴェーダ韻律において、時代が進むとともに、各音節の「軽」と「重」の区別が重要な役割を果たすようになり、その結果、1 つの「軽」音節と 1 つの「重」音節との交替により多様な韻律リズムが創出されるようになった。

他方、ヴェーダ韻律の当初から、韻文を朗唱するために必要な「息継ぎ」として、休止 yati- が韻文の特定の位置に設定される。１詩節は複数のパーダ pāda- に区分される（４パーダが多いが、３，５，６パーダからなる詩節もある）。パーダ末には必ず休止があり、11 音節以上のパーダでは、パーダ内にも休止が置かれる。

ヴェーダ韻律では、休止の前後の音節に関し、特別な傾向が見られる：① 休止直前の音節は、「軽」「重」の規定にかかわらず、すべて「重」（２マートラー）として扱われる（実際に通常よりも長く発声されたと推測される）；② 休止直後の音節は、軽重が自由である（息継ぎの後、朗唱がゆっくり開始されたと推測される）。これらの傾向は、ヴェーダから発展した韻律（音節により規定される韻律）に継承される。

音節の軽重はパーダの初めほど自由であり、終わりに近づくほど固定される傾向にある。韻律（パーダの音節数）により、休止前２番目の音節の軽重が特定の傾向を示すことから始まり、休止前の数音節（パーダ終結部）に軽重の組み合わせによる特徴的なリズムが現われるようになる。同時に、典型的なパーダ終結部リズムに対して、意図的に変化させた複数のヴァリエーションも登場する。また、終結部のリズムに呼応して、中間部や開始部にも、特定のリズムや複数のヴァリエーションが見られるようになる。1 詩節を構成するパーダは相互に独立し、同一のリズムに従う必要はなかった。また異なる韻律のパーダが同一詩節に用いられることも稀でなかった。１詩節のパーダ数も通例の４から６に拡大することも多い。

このような、詩節形成の自由さと、軽重の組み合わせによるリズムの多様性が、ヴェーダ後期から叙事詩、初期仏典などの諸韻律において増大するが、ある時期に頂点に達した後、逆に、詩節全体が特定のリズムに収束される方向に向かう。古典サンスクリット韻律では、パーダ全体の音節の軽重が固定され、4 回反復される形式が、独立した個別韻律として定義されるに至る。

（5）【韻律使用状況による変化】韻律の使用が、部族全体にとって政治的・軍事的・経済的に重要な意味を持つ大規模祭式において神々に捧げる賛歌から、婚礼や葬礼のような家庭祭式における祝歌や弔歌、さらに音楽演奏や舞踏をともなう娯楽的な叙事詩や叙情詩などへと拡大するに伴い、ゆっくりした荘重な朗唱から、速く軽快で変化に富んだ朗唱へと変化する。その結果、以下の現象が起こったと推測される：① パーダ内部の休止が不要となる；② 1 パーダの音節数が増加する；③ ２パーダの融合によるパーダ・ユガが発生し普及する；④ 奇数パーダと偶数パーダとの対比を強調する傾向が強まる;⑤ 軽重の組み合わせによる複雑なリズムが発達する；⑥ 古い時代には「重」音節を好み「軽」の連続を避ける傾向が強かったが、「重」と「軽」の対照が好まれるようになり、さらに「軽」が連続するリズムも愛好され普及するに至る。

(6)【中期インドアーリヤ語とマートラーに基づく韻律の発生】B.C.１千年紀中葉に、ブラーフマナやウパニシャッドの会話文に見られるような口語的ヴェーダ語から中期インドアーリヤ語が発生し、時代・地域・社会階層等に応じて発展したと推測される。この言語の大きな特徴は、上記の「マートラーの法則」であるが、これに対応して、音節の数ではなく、マートラーの数によりパーダが規定される韻律が発生し、多様な発展を遂げる。音節数により規定されるヴェーダ韻律においては、1 つの重と 1 つの軽とが交替されたのに対し（上記 (4) 参照)、マートラー韻律の基本は、１つの重（記号–：２マートラー）と２つの軽（記号 v:１マートラー）とが等価であり、自由に交替されることである。この原則はヴェーダから発展した韻律の中にも見られ、１つの重が２つの軽に交替される現象（resolution）が、パーダ冒頭ないしパーダ内部の休止後に起こり、その結果パーダの音節数が増加する；さらに、２つの軽が１つの重に交替される逆方向の現象も起こり、パーダの音節数が減少する。マートラー総数が一定であれば、音節数が変化して良いという方向に韻律の原則が変化した結果、マートラー韻律が発生する。

(7) 最初に現れるマートラー韻律のグループは Mātrāchandas と呼ばれる。パーダの前半部ではマートラーの数により規定されるが、後半部では音節の数と軽重が固定される。ヴェーダ韻律からマートラー韻律への過渡的段階に位置すると考えられる。Anuṣṭubh や Jagatī のようなヴェーダ韻律を起点として、その前半部では、１重＝２軽の法則により、音節数の規制から解放され、マートラー総数の枠内で自由なリズム形成がされる一方、後半部では伝統的な典型的韻律リズムが保持されて成立したと推測される。Mātrāchandas では、奇数パーダと偶数パーダとの間で、前半部マートラー総数が相違することも注目される。本来は自由であった前半部のリズムが、典型的リズムと諸ヴァリエーションのそれぞれに固定され、古典韻律の Akṣaracchandas「音節の数と軽重が固定された韻律」の中に取り込まれる。Mātrāchandas は主として初期仏典（パーリ・仏教梵語）に残っているが、リズムの自由度が文献の年代決定に重要な役割を果たす。本研究者が博士論文以来、特に集中して取り組んだ研究対象であり、従来、知られていなかった形態と発展史を解明した。

(8) Gaṇacchandas は Mātrāchandas の１種から発展し、プラークリットの代表的韻律となる。４

マートラーから成る１集合単位「ガナ」gaṇa- から構成される。４マートラーから成るガナには６種のリズムが可能となる：① – –; ② – vv; ③ vv –; ④ vvvv; ⑤ v–v; ⑥ v,vvv。しかし特定の位置のガナには syncopation 形（v–v　および v,vvv）が回避される。1 詩節は、Mātrāchandas の奇数パーダと偶数パーダが結合した２つのパーダユガから成り、各パーダユガは７ガナ＋最終音節（実際の音価にかかわらず重音節として扱われる）から構成される。最も普及した Āryā では、第２パーダユガの第６ガナが１つの軽音節のみに置き換えられ、その結果、第１パーダユガは計３０マートラー、第２パーダユガは計２７マートラーとなる。Gaṇacchandas の成立過程に関しては、Jacobi, Alsdorf が既に大筋を明らかにしているが、本研究では、Mātrāchandas の諸形態との関連をさらに具体的に跡づけた。
(9) Mātrasamaka では全パーダが同一構成であり、４マートラーから成る４ガナ、すなわち計１６マートラーのパーダが４回繰り返される。奇数ガナには syncopation 形（v–v　および v,vvv）が回避される。特定のリズムに固定された場合は、独立した韻律として古典韻律学の Akṣaracchandas に取り込まれる。
(10) Veḍha (Veḍhaya, Beṣṭha, Beṣṭhaka) はジャイナ教典や仏典における描写文（Varṇaka）に見られる「詩節を構成しない特殊な韻文」の韻律である。４マートラーから成るガナが連続し、特定の位置にあるガナには特定のリズムが要求される。Mātrasamaka との関連が注目される。
(11) 中期インドアーリヤ語の最終段階にあるアパブランシャ語の韻律には、それ以前のプラークリット韻律とは大きく異なる特徴が現れる。代表的アパブランシャ韻律である Dohā は、奇数パーダでは６マートラーから成るガナ＋４マートラーからから成るガナ＋３つの「軽」、偶数パーダでは６マートラーから成るガナ＋４マートラーからから成るガナ＋１つの「軽」から構成される。ヴェーダからプラークリット韻律までパーダ末が「重」であるという原則が守られてきたが、アパブランシャ韻律では「軽」に逆転する。この背景には、アパブランシャ語では単語末が軽音節で終わる傾向が強いという特性がある。仏教梵語文献において、プラークリット的韻律とアパブランシャ的韻律の２タイプが併存し、時代に従って後者の傾向が強まることが、H. Smith に指摘されてきたが、アパブランシャ韻律の発生が仏教梵語文献の成立と時代的に重なることが注目される。

上記の諸点を中心に、韻律の発展を具体例とともに体系的にまとめ、「古・中期インドアーリヤ語韻律の形成・発展の過程」の出版原稿を英文および和文で準備し、ほぼ完成した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

① Junko SAKAMOTO-GOṬO, ‘The Agnihotra and the Rājanya’, Karl Hoffmann 追悼論文集，招待論文，査読有，2019（印刷中）.
② 阪本（後藤）純子,「音節と mātrā：インド韻律の基礎概念—韻律学，音韻学，文法学からの検証」,『南アジア言語文化』，査読有，第 9 号，2018, p.1-55.
③ 阪本（後藤）純子,「ヴェーダ祭式 Upavasatha と仏教 Uposatha『布薩』：梗概」印度学佛教学研究，査読有，第 66 巻第 2 号, 2018, p.968-974.
④ 阪本（後藤）純子,「真実を信に献供する—古代インド祭式から念仏へ—」（第 48 回光華講座），真宗文化（京都光華女子大学真宗文化研究所年報），招待論文，査読有，第 26 号，2017, p.1－56.
⑤ 阪本（後藤）純子,「新月祭（および祖霊祭）の原初形態－Ṛgveda X 85 と Atharvaveda VIII 10 を中心に－」論集，査読有，2016, p.286 (37)－260 (64).
⑥ 阪本（後藤）純子,「出家と髪・鬚の除去—ジャイナ教と仏教との対比—」，奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集，招待論文，査読有，2014，p.334-349.

〔学会発表〕（計８件）

① Junko SAKAMOTO-GOṬO, ‘Hair and Beard of Gotama Buddha: Historical Background and Later Transfiguration’, International Buddhist Conference "Rediscovering Gotama": 2017 Bangkok (Thailand), 招待講演.
② 阪本（後藤）純子,「Veda Upavasatha と仏教 Uposatha における断食」：2017 花園大学，第 62 回日本印度学仏教学会.
③ 阪本（後藤）純子,「真実を信に献供する—古代インド祭式から念仏へ—」：2017 京都光華女子大学真宗文化研究所，第 48 回光華講座，招待講演.
④ 阪本（後藤）純子,「新月祭と祖霊祭の原初形態：リグヴェーダ X 85，X14－16」：2016 東京大学，第 62 回日本印度学仏教学会.
⑤ 阪本（後藤）純子,「祭主の Vrata と Upavasatha」：2015 高野山大学，第 62 回日本印度学仏教学会.
⑥ 阪本（後藤）純子,「Śatapatha-Brāhamaṇa XI 6,2 と Jaiminīya-Brāhmaṇa I (17-18, 22-25, 45-50)

との関係：１．王族とバラモン，２．五火説の変容，３．火葬理論と一道説・二道説，４．来世におけるアートマン」：2015 大阪大学，第４回ヴェーダ文献研究会.

⑦ Junko SAKAMOTO-GOTO, ‘Symbolism of Hair and Beard in the Vedic Rituals’: 2014 Kozhikode (India), The 6th international Vedic Workshop.

⑧ 阪本（後藤）純子，後藤敏文，「古典が私たちに語るもの―古代インド『リグヴェーダ讃歌に見る人間と死の起源』」: 2013 東北学院大学，招待講演.

〔図書〕（計１件）

阪本（後藤）純子，生命エネルギー循環の思想 ：「輪廻と業」理論の起源と形成, RINDAS 伝統思想シリーズ 24, 2015, 龍谷大学現代インド研究センター（ISBN:9784904945575）. 200 ページ.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
https://sakamotogotojunko.jimdo.com/

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。